

宮城県航空協会専務理事
おおもと
大友 宏之さん (65)
ひろゆき

仙台市若林区、3月26日死去

「愛する大空をいつまでも飛んでいたい。その夢を追い続けた」。大友久子さん(59)は夫の人生をこう振り返った。全国に名を知られたグライダー乗りだった。

1994年の世界選手権で日本代表監督を務めた。2004年には、アルゼンチンで距離飛行の世界記録をつくった日本人女性をサポートした。

元明大航空部監督の宮城県航空協会理事長木村義彦さん(69)は「技術や機体に関する世界の情報を積極的に仕入れるなどスケールが違っていた」と語る。

市若林区)に出入り。東北学院大航空部で鳴らし、卒業後も飛行場に通った。

グライダー普及貫く

「風やささやきを聞き、気流と対話して操縦するグライダーはソアリング(長時間飛行こそが醍醐味(だいごみ))」と言い、先進地の米国などにも遠征した。

「グライダーが仕事になったのはあれから」。久さんが思い起こすのは75年3月、母校の学生が相馬沖で墜落、行方不明になった事故だ。仲間を安全に飛ばす。第一人者として、そう心に決めたのだろう。「基本操作を怠ると、ビシッと怒られた」と言う人は多い。逆に、お墨付きをもらえば自信になった。

スカイスポーツの普及にも熱心だった。75年に仙台グライダークラブを創設し、理事長に就く。94年には県航空協会を社団法人として発足させ、人づくりと環境整備に腐心した。活動のベースとなる角田滑空場がある角田市に家を借り、住民票まで移した。

臍臓(すいぞう)がなが見つかったのは一昨年末。翌年初めに手術を受け、春には角田に姿を見せられるまで回復した。今年2月、転移が判明。医師に「人を飛ばすというのは厳しい」と話すなど、病床でもグライダーは頭から離れなかった。

家族と仲間たちは4月25日、仙台市でお別れ会を開いた。「湿っぽいのは嫌い」という生前のリクエストで、にぎやかな「聖者の行進」で送られた。

当日は快晴で、春の風がそよいだ。絶好の飛行日和。魂を解き放つという曲は、永遠のフライトの上昇気流になった。



モーターグライダーのコックピットで笑顔を見せる大友さん(2004年9月)

腕と経験を買われ、

照 残